

# イヌワシとクマタカ 松浪丞

いまは気候の変動でなんともいえないが、日本海は新潟県の沖あたりで、寒流と暖流がぶつかったのだそう。たしか小学校でそのように習った覚えがある。プランクトンが多く発生し、好漁場が形成されて、北方系のニシンやタラ、南方系のマグロやハタなどが、同じ区域で捕獲された。太平洋側なら福島県や宮城県の沖あたりだろう。

この傾向は植物にも当てはまる。石川県や福井県の神社には、北方系のイチイやナナカマドと南方系のクスやシイが、同じ場所で仲良く生育している。そして視点を拡大すれば、日本列島全体が世界の中では、かなり特異な地域であることが理解できるといふものだ。

表題のイヌワシは、北半球の高緯度に広く棲息する大型の猛禽だ。世界には六亜種が確認され、ウサギやキジ、ライチョウなどを捕獲する。日本がイヌワシの南限で、体はもつとも小柄だ。全身焦げ茶色をしているが、英語ではゴールデン・イーグル。つまり金鷲。北米やヨーロッパでは、明るい金褐色を呈し、日の光を浴びると青空や氷河を背景に美しく映える。

がいまも残っている。

イヌワシとクマタカは、捕獲する獲物の種類も、棲息する場所もリンクしているが、上手い具合に住み分けをして長年共存してきた。日本の豊かな自然は、希少動物の楽園でもあった。やや高山帯を好むイヌワシは、山の頂付近から尾根の上空を帆翔・旋回し、獲物を見つけると急降下して襲い、これを捕食する。狩場は樹木が疎らな斜面や、雪崩が発生して藪や蔓が削られた草原や荒地だ。やや明るく開けた場所が棲息する条件となる。

一方クマタカはといえば、飛翔・降下は似ているが、枝がからみ合う森林の中を、羽ばたきながら追跡する姿も見られる。丸みを帯びた幅広い翼は、逃げるヤマドリなどを追うのに適している。日本の国土というか、森林山岳地帯により適応しているのはクマタカだ。密生する原生林の中では、小回りが利くのがなによりの武器だ。ウサギもカモ

すばしっこいキツネや、ときには自分より大きいシカなども襲うため、力と勇気の象徴として、古くから崇められてきた。王家や貴族の紋章として、好んで取り入れられてきたのはこのためだ。生態系の頂点に君臨する、まさに王者にふさわしい大型の鷲だ。

かたやクマタカは、インド北東、スリランカ、タイ、中国南部、台湾などに棲息する精悍な猛禽だ。アジアに十種が知られている中で、日本が北限でもつとも体が大きい。営巣・繁殖する場所は、主にブナの原生林が広がる山岳地帯だったが、近年は人里近くにも姿を見せるようになった。後述するがそれは、ハンティングの獲物に関係していると思われる。

タカという名前をつけられているが、その大きさや習性からして、ワシに分類されても少しもおかしくはない。一般にワシタカ類は、オスよりもメスの方が少し大きい。クマタカも大きなメスならば、イヌワシのオスに匹敵する。因みに英語ではマウンテン・ホーク・イーグル。鷹に似た鷲という意味だ。新潟には両者が営巣・繁殖する山岳地帯

シカも、危険を感じとればすぐに生い茂った藪の中に身を隠すから。

いかに優れた飛翔能力を持っていても、イヌワシのグライダーのような長い翼では、藪の中まで追っていくことはできない。適応の度合いが、そのまま棲息数にも表われている。いささか古い数字だが、一九九〇年〜二〇〇〇年頃のデータ——環境省自然環境局野生生物課の資料による

——では推定イヌワシ約五〇〇羽、六〇〇羽に対し、クマタカ約一四〇〇羽、一八〇〇羽となっている(民間のあるバードウォッチャーの手記によると、自然界における二ホーンイヌワシの実数は、一五〇つがい三〇〇羽程度だったという)。

同じ地域で長らく共存・共栄してきた鷲と鷹だが、近年獲物をめぐって争奪の諍いが発生している。その原因を辿っていくと、国の植林事業に行き着く。戦中戦後から高度成長期にかけて、営林署は



さかんにブナ林を伐採し、杉や檜の苗木の植林を奨励した。ブナは漢字で木偏に無と書く。無だ。製材しても建築用材に適さず、あまり使い道がなかったためだという。そこで成長の早い杉、高く取引される檜が推奨された。採算優先ということ、日本の国土には単一針葉樹林が広がった。

ところが貿易の自由化で海外から安い材木が流入し、新しく建てられる住宅にも新建材が多く使われるようになる。と、国産の木材の需要は激減した。荒れた針葉樹林は生物多様性に乏しく、地表の保水力にも劣る。台風や集中豪雨のたびに災害が発生する。木材価格は低迷し、国民の多くが花粉症に悩まされるとあっては、杉山はまさに踏んだり蹴ったりだ。

深刻な被害は人ばかりではない。そこに棲息する動植物にも広範囲に影響する。人工の針葉樹林には日の光が届きにくく、可憐な山野草も生育しない。山野草が育たなければノネズミやウサギも殖えない。結果、食物連鎖の上位の動物、つまりイヌワシやクマタカも生きてゆけないということだ。

昭和の時代、効率を追求して売れる木材、稼げる林業を推進した林野行政。その真摯な取り組みが行き詰ったのはなんたる皮肉だろう。頭脳明晰な官僚のシナリオが暗礁に乗り上げたのは悲劇ではなからうか。まったく想定外としか言いようがない。

かつて日本人の心のふるさとでもあった里山は、恵み豊かで生物多様性にも富んでいた。シイタケの櫛木はたきや薪炭を確保するため、雑木林がそこかしこに見られた。春は山菜取りや木の芽摘みに、秋は栗拾いや茸狩りを楽しむことができた。それが昨今では、放置された杉林に蔓や藪がはびこり、冬の終りから春にかけてスギ花粉注意報が発令される。いまや国民病ともなった花粉症に、多くの人が鼻を詰まらせ、涙を流して苦しんでいる。人工の針葉樹林には、ウサギやカモシカも住むことができず、イヌワシもクマタカも絶滅の危機に瀕している。

世界でも珍しい自然と貴重な野生動物に恵まれた我国北方系と南方系の生命が共存してきた東アジアの細長い列島。このかけがえのない環境を後世に伝えていくには、どうすればいいのだろうか。



松浪丞

まつなみ じょう

1959 年 生まれ  
 1978 県立村上高校卒業  
 同年、神林村役場入所  
 1979 退職  
 1986 (株) 中条エンジニアリング入社  
 2019 同社退職  
 自営業 (農家) とアルバイトのかたわら、短文の創作に励む